山陽小野田市教育委員会教育長賞

「災害の自分事」

山陽小野田市立小野田中学校　２年　福屋　颯太

テレビやニュースから「想定外の」、「観測史上初」、「経験のない」といった異常気象に関する言葉を聞くようになりました。連日の猛暑日がニュースとなり、熱中症で運ばれる高齢者や豪雨で洪水となった町、台風で数日間足止めされた旅行者、自然災害の山火事で町が焼け落ちるニュースも目にしました。まるで映画のシーンのようだなと思って、漠然とテレビを見ていました。台風の進路を見て「自分の住んでいる所には来ないでほしいなぁ」と考えて、台風がそれたらラッキーと考えていました。

しかし、僕もこの夏休み、台風６号の影響で旅行に向かう飛行機が欠航になりました。とても楽しみにしていたので、残念に思いました。幸い翌日の便に振り替えることができ、一日の予定変更だけですみました。僕は初めての経験でしたが、自然災害が「自分事」になった瞬間でした。自然災害が起きれば、予定も日常の生活も全て変わってしまうことに怖さを覚えました。「台風が自分の所に来なきゃいいな」と思うだけで、これまで何の対策もしていない自分に気付きました。また、災害を受けて困る人がいることについて、考えていなかったことにも気付きました。自然災害を避けることはできません。備えるしかないと思いました。

父や母は、台風前に家の周辺にある鉢植えを屋内に入れたり、家の植栽をロープで固定したりしていました。話を聞くと、台風の風で植木が飛ばされたりすると、人に当たりケガにつながってしまったり、窓ガラスを割ったりと、二

次災害になると言っていました。一人ひとりが災害に備えることで被害は少しでも小さくできると感じました。僕もこの夏、台風対策を手伝い、「備える」を体感しました。

災害を自分事へと意識を変えると、日頃の雨にも怖さを感じました。僕の町でも、局所的な大雨がありました。母と車で買い物に行ったのですが、お店にいる間に大雨が降りました。帰り道は行きと比べて大きく変わっていました。日頃、小さな川のはずが、茶色く濁った激しい流れとなり、今にもあふれそうになっていました。とても怖いと感じました。この感情を忘れないようにしなければと思いました。

一方、この帰り道で安心したこともありました。雨の中、交通規制が速やかにされ、安全な道へ誘導を受けました。僕の住む町に備えがあることに安心を覚えました。災害が命を奪う、日常生活を奪うと、身近に感じられる夏になりました。怖い思いはしたくありません。しかし、災害はいつか必ずやってくると思います。少しでも被害を減らすために、まずは自分にできる準備を進めたいと思います。